

# いい酒の誘惑に負けてヤバいセフレを家 の中に入れたら、エグい尿道開発されて 出せないままイキ狂った

## 体験版

攻め：仙波

受け：村井

要素：69、尿道責め、空イキ、ドライオーガズム、前立腺責め、

住み慣れた家を離れた理由が、飽きたからじゃなかったのは初めてだった。まさかあの悪魔が不動産関係の仕事をしているとは。家バレした後になんか想像するだけでも鳥肌が立つ。バレた家に住む間は、常に用心して過ごさなければいけないと思うと気が気じゃない。心の落ち着く場所を確保するため、俺は即座に引っ越しを決意した。住居探しから荷造り、そして引っ越し完了までを5日で進めた速度感は過去最速だ。関わってくれた全ての人たちのスピード感を称えたい。

ただ、これは人間の仕事ぶりの話だ。人間ではないやつからすると、これでもノロくらいなんだろう。奴からかかってきた電話を無視し続けていたが、引っ越しを終えた今ならいけるかと通話を押せば、第一声から寒気のする台詞が聞こえてきた。

「やぁ村井君。新しいお家はどうか？もう荷ほどきは終わったのかな。落ち着いたなら引っ越し祝いを届けたいと思ってるんだけど、どう？」

「...普通に情報過多なんだよな？てか、なんで俺が引っ越したって知ってたアンタ」

「風の噂？」

「なるほどな。一生デマに踊らされてろクソが」

俺が奴から逃げるために引っ越したというのに、あいつは既に俺が引っ越したことを知っているらしい。しかも、荷物を運び終わっていることも把握済みだ。恐ろしい、やっぱり奴は人間じゃないのかもしれないと改めて思う。どんな情報収集能力を持ってるんだ。独自のネットワークが全世界に張り巡らされているに違いない。だがよくよく考えれば、引っ越したことくらいは前の家に足を運べば分かること。これ以上会話をしてボロがでるくらいなら、なんの情報も渡さないままに通話を終わらせよう。そう思って、俺は悪意を持ちながら適当に電話を切った。

けれど通話を終えた直後、けたたましくチャイムが鳴らされた。ゲーマーでもそこまでボタンを連打しない。引っ越し早々住居の備品が壊れるレベルだ。もちろん、誰の仕業かは見当がつく。なんで建物の入口がオートロックなのに、マンション内に簡単に入れたんだ。あとなんで俺の部屋を知ってた。ついでに中に俺がいるのもなぜ把握してるんだ。と、まあ、色々疑問が出てきて頭が痛くはなるんだが。

全ての難問は、「仙波クソ野郎ならやってのける」という回答に落ち着いたので、俺は渋々玄関のドアを開けた。

「やぁ村井く」

「お引き取りください」

「どうしてここが分かったの？みたいなかわいい反応を期待したけど、想像以上に冷たくて驚いたよ！」

「お引き取りください」

「今日ここで追い返しても、僕は毎日だって来れるけど」

「...玄関の先には入るな」

「お邪魔しまーす」

どうせ無理だとは踏んでいたが、強固な姿勢で追い返そうとして失敗した。というか、ここでも中に入れようと入れまいと、毎日来る可能性は否定できないんだが。いや、それでも奴を一回家に入れておいたほうが、再チャレンジ精神に火を付けずにすむので、できる範囲で招き入れる方が無難かもしれない。

ぬるりと俺のテリトリーへの侵入に成功した奴は、何個か紙袋を手を持っていた。百貨店のロゴが入ったそれを見て、ああなるほどと合点がいく。そういえば、さっきの電話で何かをほざいていたな。まさか本気で引っ越し祝いを持ってくるとは思っていなかった。ただし奴から受け取る義理はないと判断したので、俺は玄関より1段高い廊下部分で、腕を組みながら会話を続ける。

「まさかと思うけど、マジで引っ越し祝いに来たのか」

「君に会いたって理由もあるけど、建前上はお祝いに来たことになってる」

「俺はアンタに会いたいとも思ってなければ、祝ってもらいたいとも思ってないけど？」

「基本的に祝い事って、勝手にお祝いしたいからするものじゃない？」

「俺的には、お祝いしてくれる相手次第で嬉しさ変わるかなと思ってんだけど」

「村井君ったら、またそうやって照れ隠しするんだから」

「アンタから祝われても嬉しくないって言ってんだ。大人なら汲み取ってくれ？」

大げさに毒づいて心を折ってやろうと考えたが、奴は相変わらず嫌味を完全にスルーする見事なメンタルを持っていた。つん、と俺の頬を突つく指も腹が立つ。何勝手に触ってきてんだ。その人差し指をへし折ってやりたい。大体、どう解釈したら俺が照れ隠しをしてることになるんだ？イカれてんのか？そうだ、イカれてんだった。

けれど、俺が怒りを隠さずに不機嫌になっていると、ずいっと目の前に紙袋が差し出された。にこりと笑う奴に、俺の真っ黒なオーラはあってないようなものらしい。

「まあまあそうカリカリしないで。はいこれお祝い」

「いらねえ」

「良いお酒だよ、おつまみもある。ちらって覗いてみて」

「別に俺、酒にはそんな詳しくな——」

このあたりで、既に相手のペースに飲まれていることに気が付くべきだったんだ。でも毎度毎度どこかでうまくかわされるせいで、またしても奴の策略に乗ってしまう。チラ見しろと言われた通り、まずは酒の入っている袋を覗く。すると中に入っていたのは、酒に疎い俺でも知っているかなりレアな酒だった。箱も明らかに高級だ。知ってはいる銘柄だけれど、まず自分では買わない。そもそも買える値段じゃない。

思わず奴の顔を見た。目が合うと、にこ、と微笑まれる。もう一度袋を見る。今度は食品類。おそらくデパ地下で買って来たと思われるそれらも豪華そうだ。

俺は奴の手には触らないようにしつつ、超高級と言われるウイスキーが入った紙袋を受け取った。そして親指だけを上げた手を自分の後方に向けて、廊下の先を指さす。

「...15分だけ許す」

「ありがとう！やっぱり村井君って優しいなあ」

ぱあ、と顔を明るくした奴は、ささっと靴を脱いで俺の聖域に侵入してきた。まあでも、切符を握りしめてやってきたのだから、ほんの少しの滞在くらいは許してやろう、なんて。

住居を変えざるを得ないくらい恐ろしいやつだと数分前まで思っていたのに、なぜ警戒を解いてしまったのかと。後々いつも後悔するくせに、今回も危険性をすっかり忘れて室内に入れたのは、明らかな失敗だった。

すぐに大事なことを忘れてしまう愚かな頭は、今や目の前のウイスキーに瞳と心を奪われている。コイツのいる前で開けなくてもいいんじゃないかと思ったが、さすがにマジの高級酒だ。一杯くらいは奴に与えてもいい。実はウイスキーに見せかけたヤバい酒ではないか、もしくは何か仕掛けられたものではないかと怪しんではみたけれど、酒の瓶は完全に未開封、食事の類もそこまで怪しくはない。もし手が加えられたとしても惣菜の方だけだろうと、俺はグラスと

ボトルを持って、ダイニングにあるテーブルに移動した。なるべく距離をとれるよう、テーブルを挟んで奴と向かい合って座る。

「酒飲んだら帰れよ。それで祝ったことにはなるだろ」

「もちろん。顔が見れただけでも嬉しいよ」

「はいはい、それはよかったですね～」

ウイスキー用のグラスなんて持っていないから、適当なコップに少々注ぐ。ストレートでいって大丈夫か若干心配したけれど、まずはそのまま飲んでみたい気持ちが勝った。奴の言葉に対する相槌も適当になるくらいには、目の前の琥珀色の液体に興味津々だ。

「...、一応乾杯する？」

「したい」

若干奴に優しくなったのは、完全にプレゼント効果である。まあでも、乾杯してやってもいいと思えるくらいにはいい酒だ。これくらいは許してやろう。カチンとグラスを合わせて軽く舐めると、独特な香りが広がる。そのくせガツンとアルコールの味がせずにもろやかだ。なるほど、これが年代物のウイスキーってやつかと、今度はボトルをまじまじと見た。

「村井君ってウイスキーが好きなんだね」

「分からずにコレ買ってきてるとしたら、アンタ相当バカだろ」

「相当嫌いな人じゃなければ、このレベルのお酒なら喜ぶことが多いかなって」

「まあその狙いは合ってたってことだな。美味しい。めちゃくちゃ美味しい」

「それはよかった」

ちびちびと酒を飲みながら、これが贈り物として気軽に買える経済力があるコイツにこっそり驚いていたんだが、それを言ったら調子に乗りそうなのでやめておいた。本当はこういう相手

を手玉に取って良い生活を送るのが俺の理想なんだが、奴と付き合うにはデメリットが多すぎるので却下だ。正直この酒をもってしても、俺の払ってきた代償には満たないと思っている。そして俺の認識はある意味で正しかった。奴がそんなホイホイと、甘いものばかり手土産に持ってくるわけがなかったのだ。

「ところで村井君」

「何？」

「もし今飲んでいるウイスキーが、精巧にウイスキーに似せて作られた、超どぎつい媚薬って言ったら信じる？」

「.....は？」

いつもの通りの口調で告げられた信じたくない話に、俺の方は通常より低いトーンの声が出る。媚薬だと？このウイスキーが？いや、きっとハッターだ。瓶は箱からして未開封だったんだから。しかも媚薬だったとしたら、コイツも俺と同じだけ飲んでいる。自ら進んで毒を飲むのはありえないと思う。

しかし、普通ではありえないことをしでかしてくるのが奴だ。どこまでが真実なのか、俺はいつも計りかねる。

「ま、まァ？さすがにそれはないと思うけど？マジだったとして、俺と同じ量アンタも飲んでるけど、そこらへんは大丈夫なわけ？」

「僕はほら、ここに中和するの持ってるから平気」

ほら、と言って、奴は内ポケットから小さな瓶を取り出した。それを瞬時にひったくろうとしたら、ひょいと手を引いてかわされる。舌打ちをしたい気持ちをぐっと堪えて、俺は笑顔で手を広げた。

「そういうの持ってるなら早く言えよな。それ、俺も欲しいんだけど？」

「う～ん。でもこれ、残念だけど1本しかないんだよね。この量だと一人分だし、二人で分けるには少ないと思う」

「じゃあ俺にくれ。引っ越し祝いついでに」

「ねえ、せっかくだからさ。この中和剤、どっちのにするか賭けてみない？」

「ああ？」

だけれどここまで仕込んできた相手が、そう簡単に中和剤とやらを渡してくるわけではない。拒否されるとは思っていた。まあその場合でも、仙波クソ野郎をさっさと家から追い出してしまえばと思ってもいた。どのみちあいつに許した、15分のタイムリミットは迫っている。

そんな中で、賭けてみないかと言われたんだ。この段階で、もっと怪しいと思え、俺。奴の口車に乗せられて、どうなったかを思い出してくれ。

「もちろん僕らが飲んだのは、ただのウイスキーかもしれない。それに媚薬だったとしても、負けた方は中和剤が飲めない。僕が賭けに勝ったときにどうなるかは、村井君のお察しの通りかな」

「別に賭けなんかしなくても、アンタを今すぐ追い出して、鍵さえ閉めれば俺の勝ちだろ」

「君が用意したものみたいに、すぐに効くやつだとしたらどうするの？また前みたいに立てなくなったら？僕が何したか、もう忘れちゃった？」

痛い所を突かれて、次の言葉が出てこなくなる。おっしやる通り、前回は罠にかけようとして媚薬をもった俺が、逆にアイツから媚薬を飲まされてとんでもない目にあった。だから引っ越し事態になったんだ。覚えていないわけがない。思い出したくはないが。

だが、もしも媚薬が即効性だったとしても、中和剤が飲めるなら話は変わってくる。けれど中和剤も飲めず、かつ薬が効くまでの間にコイツを追い返すことができなければ、俺の負けは確定だ。何をされるか分かったもんじゃない。なんせ、コイツに常識は通じないんだから。

「もし決めてくれないなら、僕はこれ持ってお暇するね。中和剤はお祝いに入っていないからさ」

にこりと笑顔を向ける彼は、椅子を引いて立ち上がろうとした。その動作が、やけにゆっくりに見える。

さて、色々と考えなければいけない展開になったが、俺はどうするのが正解だろうか。いっそコイツが素直に帰ってくれたら、それはそれでいいかもしれない。出ていった直後に鍵をかければ、俺の無事は補償される。でも、このサイコパスがさっさと帰らなかったら？それより先に媚薬が効いてきたら？そのままなし崩しか？それは終わってる。一番終わってる未来だ。

ああ、クソが。考えるだけ無駄だ。飲んじまったもんはしょうがない。いいんだ、賭けに勝ちさえすりゃあと、俺は入口に向かおうとしている相手の腕を掴んだ。

「まあ、焦んな。一回座れよ」

「僕と勝負するの？」

「そうだな、アンタの賭けに乗る。でも運ゲーじゃなくて、実力で戦えるやつにしろ。そんで負けた方が、勝った方の言うこと1個、なんでもきくルールも追加しろ」

「僕は構わないけど、敗者がかなり不利にならない？」

「絶対勝つから問題ない」

「いいよ。じゃあ、どうせやるなら白黒ハッキリつく勝負にしよう」

相変わらず、顔だけはいいい仙波クソ野郎がいい顔して笑う。顔もよし、体も好み、金持ちで、部分的に見れば完璧なのに、性格がゴミなせいでなにもかもが台無しだ。そして本日もこのクソ野郎に翻弄されるのが予想できて、勝負に挑む前からため息しか出てこなかった。

奴が提案してきた勝負の内容は、お互い舐め合って、先にイッたほうが負けという、至極簡単なものだった。準備物もないし、その場で出来る手軽さと平等性を考えれば、俺らしいしまぁいいかと頷いた。これなら確かに実力主義だし、勝負の結果は分かりやすい。

さっそく俺たちはカーペットの敷いてあるリビングに移動して、お互いに視認できるローテーブルの上に中和剤を置いてから、下半身を丸裸にした状態でお互いのモノを舐め合った。体格的に俺が下になったら潰れそうなので、俺が上、奴が下のシク스티ナインになる。

「まさか村井君から自主的に舐めてもらえるなんて。棚ぼたでラッキーだね」

「...てめえ、まさかコレがしたくて勝負持ち掛けてきたんじゃないだろうな」

「いやいや、別に僕はコイントスでも、あみだくじでも良かったんだよ？君が実力で差が出るものがいいっていうから69してるだけで」

言いがかりだなあ、と奴は言ってくるが、若干疑いはかかる。でもあんまり言い過ぎて運ゲーに切り替えられたら、困るのは自分だ。仕方がねぇなと、諦め半分で奴の下半身の方を向いて、ふうと息を吐いた。

正直、俺も男相手の経験は多い方だし、フェラが上手いか下手で言えば上手い方ではあると思う。ただ、それは奴もそうだ。今の素面の状態で、どちらが強いかはお互い即答できないんじゃないだろうか。なるほど、となれば先手必勝の早期決着だなと、ためらわずに奴のモノを口に含む。ぴく、と反応を見せたアイツの熱は、徐々に硬度を増していった。

「ん…。は、む、っ、んん、んむっ」

じゅ、と唾液を絡ませて舐めていくと、むくむくと大きさを増していくそれは、今まで経験してきた全ての男と一緒に。言われてみれば、今まで俺が一方的にやられていただけで、別にコイツも感じないわけじゃない。体感的に、感度は人並みだ。となると、俺にも勝機が見えてきた。テクならある方だろ、むしろ得意分野じゃん。勝ったな、これは勝ったと、吐息とは別の鼻息が漏れた。

しかしながら、相手はやはり奴なのである。俺のモノを舐めていた奴が、不意に孔の方まで舐めてきたので、思わずガクンと上半身が崩れた。

「んふあっ！？あ、ちょ、まて、なんでそこ、舐めて...っ！？」

「ん？だって舐めていけないルールはなかったから」

「はぁ！？んっ、く、舐めるのは、ちんこだけじゃ」

「お互い舐め合って、先にイカせた方が勝ちとは言ったけど。その間に何をしちゃだめって言われなかったから。村井君もそれでいいって自分で言ってたし」

「そっ、そんなの屁理屈で、え、あ、バカ、やめろ！そっちは舐めんなっ！それじゃあ俺が不利に、い、っ、ん〜〜〜っ...！？」

ぬるり、ぬるりと侵入して来ようとする舌に気を取られていたら、俺の自身が擦られた。ふざけんな、しれっと手コキしてきてんじゃねえと相手の手を掴む。けれど、俺の体を支えたり、アイツの熱を握るためにも自分の手を使いたいから、派手な抵抗はできない。

その点、下にいる奴は両手を結構自由に使える。ぬりゅんと乳首をこねられて、俺は思わず姿勢を崩してしまった。ヤバい、これヤバいかもと持ち直そうとして、何とかアイツのものを舐める。まずい、感じ過ぎたら俺が不利だ。早く、早くイカせなければと焦る。だけどアイツが尻の孔を舐めながら、さわさわとその周辺を指先でくすぐったり、撫でたりするだけでも、膝が笑うほどに感じてしまう。

「ん、く、う、ううううあああ...！！や、めろ、やめろやめろっ！他のところ触ってんじゃねえよ！」

「ここの中だけじゃなくて、お尻全体がしっかり感じるところに育ったよねえ。あ、別に君も触っていいよ。僕の体のお好きなところをどうぞ？」

「っく、この、やろ、ふざけんな、あ、あ、やめ、っ、ひ、あ、や、やめろ！んあ、あ、く、う、うあ、も、やめろってえええ...っ！！」

ビクビクと、面白いくらいに反応を見せる身体が嫌だった。中はともかくとして、俺は尻だけで感じる程敏感じゃなかったはずなのに。コイツに変な抱かれ方をされたせいで、すっかりそこでも感じられるようになってしまった。嫌だ、舐め合いだったら俺に分があっても、他もってなったら話は別だろうと首を振る。

「はう、う、っ、こんな、こんなのが勝負になるかよ！だってアンタは別に、そっちは感じないんだろ！」

「まあ、僕はお尻はあんまりだけど。一番感じるころは無防備だし、君はそこを責めればいいんじゃない？」

「場所が少ないから俺が不利だろって言ってんの！って、くそ、そっちはズル、い、う、んんうっ！」

にゅぶ、と舌が入ってくる感覚に悶える。その間も器用な手が、止まることなく尻を撫でたり乳首を撫でたりしてきた。もちろん手コキもしてくる。逃げたいけれど、逃げたらコイツの弱点を舐めることはできない。だから体勢的には、四つん這いにならざるを得ない。圧倒的に不利な体勢でい続けなければいけない状況に陥っていることに、ぎりりと唇を噛む。

ふざけんな、この体勢じゃあ好きにしてって言ってるみたいなもんだ。こんなのは聞いてない。ダメだ、イク、このままじゃイッてしまうと思いながらも、俺はカーペットを握りしめて耐えるしかなかった。

「んあ、あ、っ、クソ、が、も、あ、あう、う、うう〜〜〜...ツッ！！」

「凄い凄い、よく耐えてるじゃない。でもこの分だと時間の問題かな？村井君、ちなみに負けたらどうなるか、分かってるよね？」

「っ、ツッ！」

負けたらどうなるか。それは死を意味すると言ってもいい。だが、俺はもしものことを考えていた。この賭けが仕組まれていたものだとすれば、俺が負ける勝負を持ちかけてくることは予

想していた。俺がどう転んでも関係なく、確定負けする可能性は最初から頭にいられていたんだ。

でも、あのテーブルには馬鹿ほど無防備な中和剤が置かれている。だったら、勝負など関係なしに、今すぐアレを飲んでしまえばいいだけのこと。屁理屈をこねて平等性をかくようなことをした向こうも悪いと、俺は伸ばせば届く距離にあった瓶を手にとって、文句を言われる前に一気飲みした。

そして飲み切って。いや、一気に飲んだからこそ、気づいてしまった。

飲み切ったあとの、喉が焼けるアルコールの感じも。風味も。さっき飲んだ引越し祝いの贈答品と、とても近い味だったことに。

「ふふ。どう？美味しかった？中和剤」

「アンタ...！これ...！」

「あ、気づいた？そうなんだよね。これ、熟成の年数は違うけど、君にあげたウイスキーと中身は一緒なんだ。最近はいちいち瓶にも需要があるみたいで、ラインナップが増えてたからさ。君にも少しおすそ分け」

俺が飲んだ小瓶の中身は、決して中和剤などではなく、ただのちょっといいウイスキーだった。酒を一気飲みして気が大きくなったからか、騙された悔しさか、ぐわりと怒りがこみ上げてきて奴の胸倉を掴む。

「ふ...、ふざけんなっ！ふざけんなよ！アンタ最初から騙す気で...！」

「騙すなんてそんな。確かに中和剤っていうのは嘘だったけどさ。ちゃんと君にとって嬉しい情報もあるよ？最初に飲んだ方も本当に普通のウイスキーで、あれに薬は元から入ってない。...でも、僕らの賭けはまだ終わってないよね？だって賭けてたものは、小瓶だけじゃないから」

「っ、うわ！？」

だけど文句を言ったら、掴んだ手ごと押さえられて、そのまま押し倒された。割と思い切り頭をぶつけたけれど、まだカーペットの上で助かった。酔いと相まって、一瞬ぐわんと視界が揺れる。でもモタついてたせいで、完全にマウントポジションを奪われてしまった。慌ててもがくけれど、俺が上に乗っていた優位性が戻ることはない。

「く、そ...！どけ、どけよ！」

「負けたら一個、なんでも言うこと聞いてくれるんだよね」

「もっ、もうこの勝負には意味がなくなったんだから、全部チャラに決まってんだろ！」

「君が追加した条件に関して、自分で責任取らないのはどうかと思うなあ」

今さらだが、勝つと信じて余計なことを追加した自分を呪うしかない。いやでも、コイツのことだ。どうせ勝負をするならと、俺が言わなかったとしても提案してきたに違いない。もし俺が拒んでも、ビビってるんだ、などと煽られれば、俺はきっとその条件を飲むだろう。

最初からこうなるって分かってたんだ。何もかも全部、コイツの手のひらの上だったんだ。いつもそう、だから警戒してたのに。酒なんかでほだされて、部屋に入れるべきじゃなかったんだ。

逃げるしかない。そう悟った時には、既に俺に不利な未来しかない状態に追い込まれている。

「い、いやだ、いやだいやだいやだっ！！どけ、俺に触るな！」

「舐めて先にイカせたほうが勝ちでいいんだよね？引っ越したばかりのカーペットを汚すのは申し訳ないから、僕が飲んであげる」

「ふざけんな、こんな、無理無理無理、い、んんんううううっ！！」

がちり下半身を押さえられて、喉の奥まで咥えこまれた。アルコールの影響をものともせず、俺を感じさせてくる舌テクがエグい。そうだよ、アンタが上手いことなんか知ってたんだ。だから速攻でイカせなきゃいけなかったんだ。もう無理だ。ああ、吸うな、吸いながら舐めん

な、球とか揉んでくんじゃねえよ...！なんでそんなに俺が感じることばかり、くそ、頭が回  
んねえくらいいいって...！

最悪だ、イク、イッたらどうなるか分かってんのに！もう我慢とかできねえって...！ああ、無  
理無理無理、出る、もう、出る...っ！

「〜〜っ！っく、イツ、あ、んんんンっ！！」

ぐぐ、とせめてもの抵抗で、アイツの喉に押し付けるように射精してやった。せいぜい苦しめ  
と思ったんだが、仕返しに強く吸われて、しかもイッた後も舐められたから、苦しむのはやっ  
ぱり俺だった。ジタバタもがいても離れていかない頭をひっぱたく。

「んぐっ、っ、も、イッた、出たってえ！」

「ん〜？」

「ん、じゃ、な、う、あ、あひっ！だ、め、や、やう、んんっ！口離せ、もお、くそっ、  
ああううう`う`...ツツツ！！！」

ガクガクと腰が揺れる。この段階でも相当キツイんだが、これは奴にとって挨拶みたいなもん  
だろう。長い長い一回を俺に味わわせて、ぐったりしたところで、ようやく口が離れていっ  
た。本当は蹴りの一発でも入れてやろうと思っていたんだが、既にビクつくだけの足は使い物  
にならない。

「さて。これで君は僕より先にイっちゃったわけだけど」

一息ついた奴は、近くに置いていた自分の鞆の方へと手を伸ばした。なんとなく嫌な予感やし  
ているんだが、怖くて目が離せない。

「僕、村井君への引っ越し祝いをもう一個用意してるんだよね。それを使って君と遊びたいんだ」

にこりと笑うアイツの鞆から出てきたのは、リボンの巻かれた細長くて黒い箱だ。見た目だけは上等な大人向けのプレゼントに見えなくもないが、この仙波クソ野郎が普通のものなんぞを寄越すわけがないことは分かり切っている。

賭けに勝って、俺が拒めなくしなければいけないもの。つまり、俺が嫌がるようなものが入っているに違いない。しかもそれは、きっとエロい用途で使うもの。

ふざけんな、俺に何を使おうって言うんだと、悔しさで下唇を噛む。涙目で奴を睨みつければ、アイツは勝ち誇った顔で、箱の角を使って俺の顎を上向きにした。

「なぁに悔しがってんの？負け犬は黙って言うこと聞きなよ」

はっと鼻で笑って俺を見下した奴は、既に俺の絶対的な支配者だった。そんなアイツがリボンを解いて見せてきた箱の中身を見て、俺はただただ言葉を失った。

通さないつもりだった寝室に強制的に場所移動を命じられた俺は、半分引きずられるように廊下を歩き、そのままベッドに放り投げられた。乱暴にされると分かっているのに喜ばしいことは何一つなく、俺は自分に近づく奴を必死に遠ざけようとする。

「いいいい、いやいや、マジで無理っ！俺、尿道系は本気で無理なんだって！」

「その様子だと、ちょっと遊んだことはあるんだ？」

「一回だけな！でもめっちゃくちゃ痛いだけだった！だから無理！絶対無理！」

犬が威嚇するようにキャンキャン吠える俺を、奴は適当にあしらっていた。その手は既に、箱の中身である尿道用のブジーの消毒に熱心だ。違うだろ、なに入れる前提でことを進めてるんだ。正当な理由で拒んでいるのにと、俺のことを気にも止めないやつの肩を揺さぶっていた。

「オイ！聞いてんのか！尿道は無理だっつってんだろ！」

「村井君とした相手の人が下手だったただけだって。今日は僕だよ？痛いわけない」

「どんな自信！？俺のちんこが傷ついたらどうすんだよ！」

「責任をもって一緒に病院行くよ？」

「余計に恥ずかしいだろうが！入れなければいいだろ！それを！」

「はぁ…。文句はいっちょ前に言うんだから。負け犬のくせによく吠えるなぁ」

「あぁ！？ふざけんな！テメェのブツにぶち込んでからものを言えよな！」

しかし、やいのやいの言っても、奴が言うように俺は負けた立場だ。あと、どう戦っても勝てる相手じゃない。向こうから折れてくれなければ、俺は絶対に尿道ブジーを突っ込まれてしまう。まずい、それはガチで苦手なんだってと震えた。片手に棒を握って近づいてくる奴から逃げるために、ベッドの頭の方に後ずさる。

「往生際が悪いよ村井くん。それに、あんまり暴れたら傷ついちゃうかも」

「ひ、い、い、いやだ、グロい、無理、だってそれ、マジで痛かったんだって…！」

演技抜きで涙が出そうになるくらい、尿道責めはトラウマだった。アイツに言った通り、俺は過去に一回だけ、当時会ってたやつから入れたいと言われて、興味本位で了承したことがある。でもそれが、痛いなのなんの。入れられてる時もそうだったけど、中も傷ついていたのか終わった後も地獄だった。確かに相手側が下手だった線はある。それでも当時の俺は、こんなものを作った奴も、これを使いたい奴の気もしれないと思ったもんだ。

だがとうとう、逃げる限界が訪れた。背中がベッドの頭に当たって、奴とベッドボードに身体が挟まれる。

ピトリと、俺の熱にブジーがあてがわれた。ぞっと一気に鳥肌が立つ。咄嗟に奴の両腕を握って首を振っていた。

「まっ...！こ、怖いってマジでえ...！」

「お、ここまで弱ってる村井君は貴重だね？ほら、緊張しすぎだよ？いっぱいローション付けたから大丈夫だって。一番細いのにしたし。痛くない、痛くない」

「う、ううう.....！」

俺をなだめるように手をどけながら笑う彼は、なんだか楽しそうだ。俺は笑えない。恐怖しかない。しかも相手がお前なことが余計によくないんだよと、ひたすらに震えていた。けれど無慈悲なコイツは、とくにためらいもなく俺に棒を突っ込んでくる。鬼め、容赦なしか。

だけど奴が上手いのは確かなようで、最初はビビりまくっていたものの、違和感はある痛みはそれほどなかった。前は泣きわめいてすぐに取りってもらったけれど、今日は耐えがたい激痛は襲ってこない。そこで肩の力を抜いたおかげか、棒はゆっくりと奥の方まで入っていく。意外と長さはあったのに、どんどん入っていくのが我が身のことながら恐ろしい。

「そっ、そんな入れんなよ、もう抜けって」

「まだだめ。いい所に届いてないから」

「いっ、いやいや、入れすぎだって！そんなに入れたらヤバいって！」

ずるり、ずるりと、時に抜いて、また入れられていく。もし暴れたら痛いかもしれない、何も出来ずに見ていることしかできない。目をそむけたいけれど、その瞬間に乱暴されたらと考えると怖くて目が離せなかった。だから、自分の大事な部分に異物が入っていく様子を、ただただじっと見つめる。

「んん、っ、っ、怖いってえ...」

「怖くない怖くない。もうちょっとだと思ってるから頑張ってる」

「も、ちょっとって、何、が——...!!!？」

出ている棒の長さが短くなっている分、俺の中にブジーが入っているんだと思うと恐ろしい。最初の時と比べて、持ち手側はかなり短くなっている。やば、すげえ入ってるって、そんなに入れたら万が一怪我した時抜けなくなるかも、なんて不安がよぎった。けれど俺が怯えていたとしても、目の前の悪魔にかかれば全てを快感で上塗りすることが可能だ。

こつんと、ブジーが奥まで届いたような感覚がした。その瞬間、恐怖で埋め尽くされていた脳内を割くように快感がめり込んできてくる。ざわりと、自分の中心から背中にかけて、一気に気持ちよさが広がっていく。ひ、と最初は小さい声が出た。一瞬起きた強烈な快感に意識が持っていかれて、まだ理解が追いつかなかったから。けれど、緩く動くそれが最奥を擦る度、ビク、ビクンと足が揺れれば、もう分からないではすまないレベルに至っていた。

「くひ...っ!!!？う、は、は、は、んんうううっ!!!??」

「その様子だと、もう痛いだけじゃなくなったかな？」

「あ、く、な、なに、っ、や、やめろそれえ...っ!!!」

「気持ちいい？でもほら、あんまり暴れたら変なところに当たっちゃうかも。じっとしていた方が村井君のためじゃないかなあ？」

「ふぐ、う、あ、ああああ...!!!っ、ち、が、勝手に、勝手に動、い、あ、あううううっ!!!」

ぎゅっとシーツを握れば、一緒に揺れ動きそうな手はその場にとどめることができる。だけど足や腰はどうしようもなかった。動いたら危ないことも分かっているし、極力じっとしておいた方がいいと思っている。でも無理だ。こつ、こつ、とブジーを上下に揺すられる度に、ただ熱を扱かれるのとは別種の快感が押し寄せてくるのだから。しかもこれが中々に強烈だ。どちらかというと、内側からこみ上げてくる感覚に近い。

なんだ、なんだよこれ、どうなってるんだと自分の熱を見る。いつの間にか勃起しているそれからは、持ち手の部分だけが飛び出ている状態だ。奥まで入れこんでいるとしたら、かなり深

い部分を刺激しているのは間違いない。そして突かれている謎の部分に、俺は少しだけ思い当たる場所がある。だけど、そうだとしたら俺にとっては非常に不都合なことになる。どうか見当違いであってくれ、俺の知らない謎の臓器であれ。だってもし、今俺が擦られているのが、思った通りの場所であるなら。この仙波クソ野郎が、みすみす見逃してくれるわけがないんだから。

「あひ、っ、んんんっ！あ、も、やめろ、やめろってえ！！」

「うんうん、村井君も気づいてきたみたいだね。この棒が押してるのがどこかってこと。

まあ、お察しの通り前立腺ではあるんだけど」

「あぐ、う、な、なんで、前からも押せるなんて、ありえな...！」

「まあ簡単には押せないよね。僕だって素手では無理だよ。でも逆側からなら押せるから、本当に棒が当たってるのか、押して確かめてみよう」

「はぁ！？な、何言って、ばっ、やめろやめろ！入れんな、あ、あく、んんうううっ！」

そして俺の予想は、悪い方で当たっていた。でも、コイツの発言がはったりで、俺がビビるのを楽しんでいるだけなのかもしれない。でまかせであれと祈る。前立腺を弄られるとしても、両サイドから挟み撃ちなんて悲劇が起こる方が嫌だ。別々の器官であってくれ。指を入れられたこと自体が、俺にとってはかなり不利にはたらくんだから。だってコイツは、尿道なんか責めなくなって、指だけで俺をドロドロにできるんだから。頼む、頼むから最悪の結果にはなるなと目をつむった。

だけど、相手がぬりりと前立腺を指一本で撫で上げた瞬間。前と後ろ、両面から前立腺が刺激された感覚が、下半身を中心に巻き起こった。バツンと意識がなにもかも持っていかれるような、強烈な快感。閉じた目を一気に開く。その余韻が覚めないうちに、再びこりこりと擦られてしまえば、背を大きくのけぞらせて、簡単に中イキを許してしまった。

「っ、は——……！！？？んぐ、ッ！？ううあああ`あああ`あ`あああ！！！！？」

「お、やっぱり村井君くらい仕上がってる子だと、簡単にイケちゃうか。でもそれはそうだよ  
ね。普通にここ擦られてもイクんだから、前と後ろからされたらイチコロだよね」

「ふぎっ！！？あ、あんんっ！や、めっ、えううっ！擦んなっ、触んなあああっ！」

「じゃあほら、こっちをトントンしてみようか」

「んんぐっ！！！？あああだめだめだめっ！！そっち、は、はひっ、ひいいいあああ  
あっ！！」

もしも奴に、ただ一つ褒められる点があるとしたら、とにかくセックスに関する技術が突出していることだと思う。それは手マン一つとってもだ。しかも弱い責め方を把握されている俺は、アイツにちょっと擦られた程度でもひんひん泣かされてしまう。我慢できるレベルじゃない。強制的に全ての思考を奪われるくらい気持ちいいんだ。慣れてる俺が言うんだから相当だ  
と思う。

そこに今日は追加で、不慣れなブジーからの攻撃も加わった。ブジーの厄介なところは、ガツンと叩きつけられるような快感がかなりキツいのもそうだが、やっぱり暴れたら危ないんじゃないかという、心の中にある恐怖に抗えないことだ。いつも前立腺を責められたら、危険を察知してもっと抵抗している。でも今日はそうできない。自分の熱を人質にとられている。だから両サイドからの攻撃を受けても、多少身体をビクつかせて受け入れざるを得ない。

こちゅ、こちゅ、と淡い力で前から前立腺が圧迫される。その時に、こみ上げてきた先走りや精液も一緒にかき混ぜられて、腹の中が煮えるほどに熱くなった。ごぼりと、時に入口の隙間から溢れてくる感覚もよくない。まるで軽い射精みたいで、頭が震える。後ろを擦る指も、1本から2本に増えていた。挟んで擦ってくるのもかなりいいんだが、軽く押し込んで、2本の指でぐるぐると優しく円を描くように撫でられると、ブジーとの相乗効果で目まいがするほど気持ちよかった。バチバチバチっと視界が弾ける。ぐ、と息が詰まっても、とんとん、と前から前立腺が叩かれて身体がはずむ。はふ、と情けない息を吐けば、ちゅ、と乳首に軽く吸い付かれて死ぬかと思った。馬鹿が、感じる部分をこれ以上増やしてくるな。自分にとってやりやすい位置取りに移動してくるな。

くそ、くそ、ふざけんな、なんでいつも俺は、コイツに良いように弄ばれてんだ！と腹が立つ。だけど腹が立ったところでだ。ここは俺の家なのに、いつも寝るベッドの上なのに。なんで俺は、俺を犯す目的で家に入った仙波クソ野郎に押し倒されて、イカされまくっているんだと、ガクガク膝を揺らしながら嘆く。

「んんんんああああっ！！！！やあっ！も、入れ、ん、な、あ、ひー——…ッ！！っ、ぐ、イク、イツ、だ、も、もぉイツ、んんっ！あゝっ、だ、め、今、今はあっ！！」

「すごい締め付けだよ、中。今日は君の前立腺を、もっと敏感にしようね」

「い、らな、いらないいっ！ああああやだやだっ！！イツ、ぎ、んんっ！んんんんんっ！！ッ、は、はあ、は、つくうううう…！っ、ひゃう！やえ、胸は、んんう！だめ、だめだめだめ、吸うなっ！ば、かあ…っ！」

「ん～、今のばかって言い方、可愛かったなあ。もう一回同じ感じで言ってみて？」

「死ね、変態！」

「なるほど。ちょっと言葉の変換器の調子が悪いみたい。これは僕の修理がいるかもね？」

「んぎいいいいいいゝいゝっ！！！！！！？ああああああやめろやめろ！！イッてる！イッて、ん、んんっ！！うは、あ、あああああうゝうううう……ッッッッ！！！！！！」

尿道の棒は、入ったままで動かなくても、いい位置にあればキツイ快感が襲ってくる。それを奴も見抜いたのか、俺を押し倒して、位置を調整してから別の場所への刺激にお熱になってしまった。相変わらず手マンは続いていて、むしろ激しくなっているんだから頭が痛い。ごり、ごり、と強く押し込まれる時もあれば、素早く擦られるときもある。たまに焦れるくらいゆっくり擦られる時は、期待で腰が浮いてしまって最悪だった。腰が浮いちゃうね、もっとしてほしくなったの？なんて耳元で言われると、羞恥で死にたくなる。んなわけあるか！と言ってやりたいが、火に油なので唇を噛んでごまかす。

あとは、胸の責めに手と口が加わったのも非常に良くない。この仙波クソ野郎のせいで、そちらも相当過敏になっている。じゅる、と音を立てて吸いながら、舌で舐めるテクはマジでどうなってるんだ。それだけでイキそうになるのはおかしいだろ。しかも離れない。吸い付き力が

高すぎる。逃げなきゃ、と身を振ってみても、反対の乳首をきゅうっと摘ままれると動きが止まってしまう。甘い声を上げて固まった俺をほぐすように、すると乳首からわき腹までを滑る手に翻弄される。嫌だ、こんなことくらいでとまた逆方向に身体を揺らせば、時折零す先走りで濡れた熱をじっくりと扱かれる。あまりにも弱点をピンポイントに狙った刺激で、思わず顔を腕で覆って悶えまくってしまった。

「ひうううん...ッ！！あふ、う、ううああああっ！や、あ、それ、それやば、あ、あんん、んっ、っく、あ、は、はひうっ！」

「相変わらずエッチな身体だよね。どこを触ってもイッてるし」

「〜〜っ！こ、れは、あんたの、せいで...！」

「どこでもイクっていうのは否定しないんだ？」

「はううううう...っっ！！？やっ、だめだめだめ、そ、そこそんな、んひ、は、はげし、いあ、あ、ああああああああっ！！！」

ぐちゃぐちゃといやらしい音を立てながら、中に入った指が俺の前立腺を引っかいている。くう、と喉から声が絞り出て、顎が上を向く。ガク、ガクガクと膝が揺れた。イッている。アイツの指で良い場所を押される度に。暴力的に気持ちいい時間が与えられて、ただただ逃げ出したくなった。でも逃げたいと思うその時間も指が動いている。くにゅり、くにゅりと前立腺を揉みこみながら出し入れされる指が、ばらばらに動いては俺の想像もできないような刺激を与えていた。

「ふあああああっっ！！いああああやだやだっ！イ、...っ、く、う、は、は、あひっ、だ、だえ、だ、も、やめ、ッ、ん、う、そこだめ、んんんっ！んんんうううっ！！」

でも、苦しいのは刺激される内部の良い場所だけじゃない。出口を失って、張りつめていくばかりの双球も嘆いている。いい加減にこちらからも出させてほしいと訴えていた。だけれど、射精するには通り道を塞ぐブジーを抜かなければいけない。

ブジーを固定する器具はないので、自分で抜けそうではある。だが、適当に弄って自分の身を傷つけるのは怖い。かといって、素直に取ってくれと言っても、奴が取ってくれるかは微妙だ。さて、どうするかと、快感に翻弄される頭を使いながら悩む。

抜いてくれと言ったら、何か交換条件を出されてしまいそうな気がする。だったら、自分で抜いてしまった方が確実じゃなかろうか。しかし俺が自らブジーを抜くのを、コイツが簡単に許してくれるとは思えないが。ならば止められる前に、一気に抜き切ってしまうのがいいか。

色々と考えてみたが、どのみち出来ることは限られている。抜いてと頼むのが、現段階では一番愚策なのは火を見るよりも明らかだ。となると、やはり自分で抜く方がいい。よし、ならばスピード勝負だと、俺はコイツの手が乳首に移ったのを見計らって、素早く自分の熱に手を伸ばした。最悪傷がついてもいい。少々の間は不便さと痛みを耐えなければいけないが、治るのは経験済みだ。ビビらずに引っこ抜けと自分を奮い立たせて、ブジーを上方向に引き上げた。けれどここで、痛恨の見落としがあった。

俺のなかでは、ブジーはあくまで痛い物の認識。動かせば痛みか、もしくは解放に向かっていく安堵感がこみ上げるかどちらかだと思っていた。

「ふぎ...っ！？い、いいいい...ッッ！！？」

それなのに、まさか自分の手が止まるほど気持ちいいなんて。1センチ上にずらせば、その分精液がせり上がる感覚に、こんなに切羽詰まるなんて。一体誰が、予想できるだろうか。

「な...っ！ッ、は、は、うぐう...！？」

ガチンと身を固めて息を吐いた。はく、はく、と声もなく悶える。なんだこれは、なんなんだこれは。ぞっとするほど気持ちよかった。一気に引き抜けるわけがない。でも、徐々に引き抜いても相当な時間がかかる気がする。ヤバい、早くしないといけないのにと、俺は焦る気持ちと、襲い来る快感で苦しんだ。

「は、は、はうんんん...っ！っふ、っぐ、う、あ、あああっ！」

「わぁ、村井君ったら自分で弄ってオナってんの？気に入ったんだね、ブジー」

「な、わけ...！ん、ぐ、っ、も、キツすぎんだよ、これえ...！」

ただ、不幸中の幸いがあったならば、なぜか俺がブジーを抜こうとしているのが、奴から見逃されたことだ。ブジーを使ったマスターベーションだと思っているのは、相変わらずとち狂っていたが。だが、まあいい。余計な手出しをしてこないならそれで。このまま抜けるなら、それに越したことはない。例えその間に、楽しそうに笑うアイツからねっとりと前立腺を揉みこまれても。卑猥な言葉を囁かれながら、首筋や耳を舐められても。あと少し、あと少しで解放されるんだと、この先の射精間への期待で耐えていた。

「ふ〜〜〜.....っっ！！は、はぁ、はぁうっ！んん、んんんんっ！」

「ちょっと抜ける度に、ビクビクって震えるのがえっちだね。お腹の奥まで気持ちいいのが溜まってる感じかな？中でいっぱいイッたせいで、全身敏感になってきてる気がするね」

「は、はひいい...！さ、わん、なっ！ちが、舐めるのはいいわけじゃ、あふ、っく、う、う  
ううう〜〜〜っ！！んんぎっ！っはぁ、うううああっ、あゝあ、っああゝ、〜〜  
〜ッッ！！」

奴からの悪戯は途切れず、棒を抜く間に何度も出せないままイッた。同じくらい中でもイッたと思う。だけど手を止めたら終わりの気がして、根性で残り3センチか、もっと短いくらいまで抜けた。よし、ここまできたらと俺は一呼吸入れる。長かったし辛かったが、ようやく終わりが見えてきた。あとは少々無理をしてでも、ここから一気にと気持ちを整える。ふう、と息をついた。そして、俺がブジーに手をかけて、最後の力を入れようと思ったところで。

「はい、尿道オナニーはおしまいね」

「————.....ッッッ！！！！？あ、あああああああゝあゝああああっ！！！！？」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー